

日本福祉大学社会福祉学部・日本福祉大学福祉社会開発研究所
『日本福祉大学社会福祉論集』第 114 号 2006 年 3 月

幼児体育における教科内容と教材の関係

——「ラグビーパスボール」の実践分析から——

山 本 秀 人

目 次

はじめに

1 T 市 N 保育園における保育計画の作成

2 「ラグビーパスボール」の実践

(1) 「ラグビーパスボール」の誕生 (教材化)

(2) チーム人数の決定と記録係を決める

(3) ゲームの様子を VTR で見る

(4) 男が強い, 女は弱い? —— チーム決めに子どもたちの手に ——

(5) 最後の対戦

3 子どもたちは「何」がわかったのか

おわりに

はじめに

幼稚園や保育所での体育の取り組みにおける 5 歳児の子ども像, 言い換えるなら卒園時までに子どもたちに体育で身につけさせたい教科内容を, 筆者は次のように描いている。

(1) 自分自身について, できた・うまくなったという実感をもっている, (2) 友だちの動きと自分の動き, 友だち同士の動きの違いを見つけ教えあうことができる (技術の比較, 技術認識, 自己認識, 他者認識), (3) 友だちができるように, うまくなったことをみんなで喜びあえる (他者認識, 集団認識, 人権意識とヒューマニズム), (4) ルールの必要性や重要性について理解し, 必要なルールづくりができる (社会認識, ルール認識), (5) みんなで決めたルールや約束事, 順番が守れ, 必要な準備や後かたづけができる (社会認識, 集団認識), である。各項目の () 内は, 子どもたちが教科内容を自分のものにするために「わかる」必要があるものである。

以上の教科内容を子どもたちに身につけさせていくためには, 保育士による教科内容に応じた教材の選択とその指導方法が決定的に重要になってくる。つまり, 「この教科内容を達成するためにはこの教材が適している」というように, それぞれの教科内容を子どもたちに身につけさせ

るのに適した教材を選択していく必要がある。もちろん、教材によっては前述した教科内容を複数身に付けさせることが可能なものも存在するであろう。

しかしながら、わが国における幼稚園や保育所での体育の取り組みは、このような教科内容と教材の関係を視野に入れた実践については、ここ数年ようやく展開されはじめたというのが実状である。何らかの運動を「できる」ようにすることのみに主眼をおいた保育実践、あるいは「できないのも個性」という捉え方をし、「できるようにならないのは子どものせいである」というような保育実践も少なからず存在する。

保育を学ぶある学生は、「これまでの体育・スポーツの自分史とゼミテーマに関わる問題関心」というレポートのなかで、次のような思いを綴っている。

「これまで自分が受けてきた体育については、ひとつもいい思い出がない。あるのは嫌なことばかり。なかでも私が小さいとき一番ショックを受けた言葉は、『ちゃん是可以のよ。どうしてあなたはできないの』という保母^(ママ)さんの言葉だった。先生は何気ないつもりで言ったと思うけど、その時のショックが尾をひいて小学校五年生まで鉄棒の逆上がりができなかった。保母^(ママ)さんの一言で体育ぎらいになるのもあるし、……」。

この保育士は、「ちゃん是可以のよ。どうしてあなたはできないの」という前に、なぜこの子どもを逆上がりができるようにしなかったのであろうか。おそらく、できるようにしなかったのではなく、できるようにすることができない自分の責任を子どもに転嫁したにすぎないのではないだろうか。もちろん、子どもにとって何かの運動が「できる」ようになることは大きな喜びをもたらしてくれることは事実であるが、はたしてそれだけが体育で子どもたちに教える内容でいいのであろうか。

また、ある保育所で次のような場面に遭遇したことがある。

5歳児の子どもたちが園庭でドッジボールを楽しんでいたところに、同じ5歳児の子どもが「いれて」といいながら走りよってきた。その様子を見ながら、「いいよ」という声が返ってくるであろうと期待していたのであるが、それに反し「だめ、おまえはへたくそだからいれてやらない」という反応であった。この場面をどのように考えればいいのであろうか。「いれて」という願いを拒否した子どもは、意地悪な子どもという見方もできるが、認識面で捉えてみると、「うまい」と「へた」の関係を客観的に比較できているという見方もできる⁽¹⁾。ここで重要になってくるのは、ドッジボールという教材で子どもたちに何を教えるのかという教科内容の検討であり、そのためには教材の持っている特質を吟味する必要があるだろう。つまり、子どもたちに取り組みせたい教材の分析、いわゆる教材研究が不可欠となる。

以上のような「うまい」と「へた」の関係を比較しはじめる最初の年齢は、幼児期であるといえる。つまり、運動の場面において自分を基準にして自分と他の子どもとの動きを客観的に比較することが可能となり、「自分はその子に比べ運動がうまい・得意、あるいはへた・不得意なんだ」という技術の違い、さらには自分が「勝った」あるいは「負けた」という二分的な評価について明確に理解しはじめるのが4歳児である。さらに5歳児では、自分と他の子どもとの比較に

加え、他者同士の技術の比較も可能になってくるのである。

言い換えれば、自分と他者の関係を客観的に捉えはじめ、「自分はあの子に比べ、運動がへた・不得意だ」と感じた子どもは、体育の場面を避けはじめてしまうのである。そのまま放置した場合、「体育ざらい・運動ざらい」になってしまうのであるが、保育士からの適切な指導によっては乗り越えていけるのである。

このような幼児期の発達の特徴からも、幼稚園や保育所における体育の教科内容研究、いわゆる「体育は何を教えるものなのかについての検討」の重要性を指摘できる。

この小論では、2004 年度に T 市 N 保育園の 5 歳児クラスにおいて取り組まれた「ラグビーパスボール」の実践を分析することから、幼児体育における教科内容と教材の関係を明らかにしていく。

1 T 市 N 保育園における保育計画の作成

T 市 N 保育園は、愛知県の南部に位置している。公立保育園であったものを、1998 年に設置主体を T 市から T 市社会福祉協議会に委託し公設民営の保育所としたうえで、それを機にデイサービスセンターを併設している。さらに、2005 年度からは市の方針もあり完全民営化となっている。

表1 教材とそのねらい

教 材 名	教 材 の ね ら い
マット運動	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の身体の動きがわかり自分の意志で身体を動かすことができる ・自分の身体を使い空間を表現する楽しさを味わう ・自分の動きと友だちの動きの違いがわかる ・友達同士の動きの違いを見つけ教えあうことができる ・自分達で準備、後かたづけができる
水 あ そ び	<ul style="list-style-type: none"> ・呼吸の仕方がわかる ・伏し浮きをして浮く感覚を知る ・けのびをして脱力する感覚を知る ・自分の身体の動きがわかり自分の意志で身体を動かすことができる ・自分の動きと友達の動きの違いがわかる ・友達同士の動きの違いを見つけ教えあうことができる
ボール運動	<ul style="list-style-type: none"> ・走りながらボールをパスしたりスピードやリズムをコントロールする力を養う ・人や物の動きを予測・判断して動く ・自分達でルールを創り役割交代して楽しむ ・決められたルールを守りながらあそぶ ・自分達で作戦をたててあそびを展開する
鬼 あ そ び	<ul style="list-style-type: none"> ・走りながら方向転換をしたりスピードやリズムをコントロールする力を養う ・人の動きを予測・判断して動く ・自分達でルールを創り役割交代して楽しむ ・決められたルールを守りながらあそぶ ・自分達で作戦をたててあそびを展開する

2002年度から、「『運動あそびを通して、最後までやり遂げる力を育てるには』について、各年齢の子どもの発達過程を学び、知る。乳幼児期の運動発達と認識発達を学ぶ」（平成15年度N保育園運営管理案より）ことを保育所全体の研究課題として位置づけ、筆者と保育士との共同の取り組みとして体育指導を取り入れている。

2004年度N保育園における5歳児の取り組む教材とそのねらいは、表1のとおりである。

2 「ラグビーパスボール」の実践

(1) 「ラグビーパスボール」の誕生（教材化）

N保育園では、2003年度に「パスボール^{註1)}」という名称がついているボール運動に取り組んでおり、2004年度においても同様の取り組みを年間指導計画に掲げ取り組みはじめるのであるが、子どもたちの状況からパスボールを原型としながらも、保育士と子どもたちが「ラグビーパスボール」と命名したボール運動を創りあげ取り組んでいる。

「ラグビーパスボール」の取り組み内容は、表2のとおりである。

例年、10月の第2土曜日に開催される運動会も終わり、昨年度の子どもたちも取り組んでいた「パスボール」に取り組みはじめようと考えていた保育士は、自由あそびの時間に3人の子どもに「パスボールやってみない?」「パスボールやる?」と誘いかけ、保育士を加え2対2で園庭の両サイドに置いたロードコーンを的にやりはじめる。敵チームのロードコーンの的にボールを数多く当てたほうが勝ちというゲームである。2対2ということもあり、ボールを持つとすぐに的にまで走りボールを当ててしまうという状況が続く。ただ走ってボールを的に当てるという動きに終始してしまい、すぐに疲れてしまいパスボールのおもしろさを子どもたちが感じられないようであった。

次の日、保育士が昨日と同じ子どもたちに「パスボールやらない?」と誘うが、「いやだ」との返事。「何で?」と聞くと、「つまらん」「つかれる」との反応。さらに、「何でつまらん?」と聞くと再度「つかれる」との声。保育士は他の子どもたちを誘い、的であるロードコーンのまわりに丸の線を引き、的にボールを当てる際に入ってはいけない制限区域を設けてやりはじめる。昨日とは違いボールが的になかなか当たらない状況が続くことによりゲームそのものが盛り上がり、それを見ていた「やらない」と言っていた子どもたちが「やっぱり入れて」とやってくる。

保育士も加え、4対4で「パスボール」を再開する。保育士が敵チームのボールをとりにいく動きをおこないシュートしようとする相手にディフェンスをしはじめると、シュートできないと判断した子どもが味方にパスをだす場面がではじめてきた。しかしながら反面、いくつかのトラブルも発生する。ある子どもは、自分にボールがパスされないため怒りだしてしまう。またある子どもは、一度もボールにさわることができないため、その場に座りこみ砂あそびをはじめている。さらに、なかなかボールにさわれない子どもが、ボールを持っている敵の子どもを服を引っ張り、たたいてしまうということも起きてしまった。

表2 「ラグビーパスボール」の取り組み内容

月 日	ね ら い	内 容	活 動
4 月 から 9 月	・ボールに慣れる	<ul style="list-style-type: none"> ・手の平でボールを受け取る ・決められたルールを守る 	<ul style="list-style-type: none"> ・保育士とのキャッチボール ・友達とのキャッチボール ・腕を大きく回すことがポイント ・タオル投げ（片方の端をしばり、しばらないほうを持って投げるマネをする） ・ルールのあるパスボール ・玉入れのかごをゴールに見たてたバスケットボール ・プールでのパスボール
10 月	・パスボールの取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・決められたルールを守る 	<ul style="list-style-type: none"> ・的あてを取り入れたパスボール
11/ 2 11/10 11/12	・ラグビーパスボールがおもしろいと感じるように	<ul style="list-style-type: none"> ・全員がゴールする喜びを知る ・パスの意味を知る 	<ul style="list-style-type: none"> ・ラグビーパスボール ・全員がゴールしたら勝ち ・一度ゴールした子どもはゴールできない ・生活グループで実施
11/18			<ul style="list-style-type: none"> ・記録、点数表が必要なことが試合をしていくなかでわかる ・ゴールしたら名前を書く ・道具の準備は子どもたちで行う
11/29			<ul style="list-style-type: none"> ・保育士の意図した4人組でゲーム ・はじめに名前を書き、ゴールしたら 印をつけることに変更 ・得点、記録を子どもたちが行う
12/ 3			<ul style="list-style-type: none"> ・時間について（1試合にかかった時間を表に書いて知らせ、どのグループも同じ時間にする） ・ストップウォッチを使用（子どもたち）
12/ 7			<ul style="list-style-type: none"> ・意味のあるパスについてビデオを見てみんなで考える（3つの場面） ・空間パス練習
12/14			<ul style="list-style-type: none"> ・ゴールについての話しあい（両足ゴールの確認）
1/27	・チームプレーができるように	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちで作戦を立ててあそびを進める ・チームで協力してゴールする充実感を持つ 	<ul style="list-style-type: none"> ・しっぽとり（ジャンケンでチームを決める。終わったあと負けたチームから、強い子が多い、女の子が多いとの声）
1/31			<ul style="list-style-type: none"> ・しっぽとり（前回のことから女の子同士でジャンケン、男の子の強い子同士でジャンケンしてチーム決め）
2/ 8			<ul style="list-style-type: none"> ・話しあい（女の子ははたして弱いのか？ 女の子、男の子の力の差はあるのか？） ・側転の時の例をだす
2/10 2/22 2/24			<ul style="list-style-type: none"> ・ルールの提案と確認（全員ゴールしたら勝ち、一度ゴールしたらその子どもはゴールできない、ゴールしたら帽子を白にかえる、両足でゴール、試合時間を4分から5分に変更） ・赤、青チームメンバーを保育士が意図して決める（そのなかで子どもたちが4人組を決める）
3/ 1			<ul style="list-style-type: none"> ・最終的な4人組を子どもたちだけの話しあいで作る ・試合順序、対戦相手を子どもたちだけの話しあい決定
3/16			<ul style="list-style-type: none"> ・話しあったメンバーで最後のゲーム

ゲーム終了後子どもたちから、「つまらん」「ボールにさわれん」「パスしてくれん」「ボールが的にあたらん」という声が続出してしまった。このゲームを通じて保育士は、ボールゲームに取り組む際には、「ルールを守らないとゲームができないこと」「チームで協力すること」「パスの技術が必要なこと」「パスには意味があること」「人や物（ボール）の動きを予測・判断する能力が必要なこと」などを子どもたちにわからせる必要があることを痛感し、「このような状況でパスボールを実践していいのであろうか？」「パスがとおりゴールが決まった時の『やった』という思いをすべての子どもに味あわせるためには何が必要なのか？」という疑問を抱くことになる。さらに、今の5歳児の状況を考えると昨年度と同じ内容の「パスボール」ではうまくいかないと判断し、あらためて「このような子どもになってほしい」という体育における子ども像を再検討することにしたのである。

その結果、「ルールの必要性や重要性について理解し、必要なルールづくりができる」「みんなで決めたルールや約束事、順番が守れ、必要な準備や後かたづけができる」ようになってほしいという子ども像を設定したうえで、次にそれらの子ども像に接近するためにはどのような教材が適しているのかという教材選択にはいったのである。表1にあるように、5歳児が取り組む教材として「マット運動」「水あそび」「ボール運動」「鬼あそび」が位置づいているが、それぞれの教材の特質を分析すると、保育士が掲げた子ども像に近づくためには「ボール運動」が最も適していると判断し、さらに「ボール運動」の教科内容を「チームで協力してゴールする充実感を味わうことができる」「自分達で作戦を立ててあそぶことができる」「決められたルールを守りながらあそぶことができる」と設定した。次に、これらの教科内容を達成するためには昨年度の5歳児が取り組んだ、的にボールを投げ当てる「パスボール」そのものでは困難であるという結論に達し、「チームの全員がゴールしたチームが勝ち」「一度ゴールした子どもはゴールできない」「ボールをぶつける的をなくす」というルールを出発点として、ボールゲームを創りあげていくことを子どもたちに提案するのである。

以上の経緯について保育士は、「5歳児が例年取り組んできた的あてのパスボールでは、ねらい（教科内容）を達成するにはむずかしい教材だと判断した。取り組む教材が先にあるのではなく、子どもたちに身につけさせたいねらいが先にあり、そのねらいに応じて教材を選択したのである⁽²⁾」と述べている。

11月のある日、いよいよ新しいボールゲームのスタートである。保育士がボールゲームをすることを子どもたちに伝え、「やった～」「いやだ～」「パスボール？」など反応は様々であった。保育士が、今日からやるボールゲームは、前みたいないパスボールではなくホールでやること、「チームの全員がゴールしたチームが勝ち」「一度ゴールした子どもはゴールできない」、さらに「ボールをぶつける的をなくす」ことを提案し、ゴールをどのようにしたらいいのかを子どもたちに考えてもらうことにした。子どもたちから、マット運動の取り組みの際に使用したことがあり、そこにとびこむおもしろさを感じていたセーフティマットをゴールにすればいいという声があがり、ボールを持って敵のセーフティマットに入ればゴールというルールができあがる。

早速、新しい「パスボール」に取り組むためホールへ移動。

「ゲームをする時に大切なことは？」と保育士が問いかけると、「怒らない、たたかない」という声。ホールの両サイドにおかれたセーフティマットめがけてゲームが始まると、ルールを理解している子ども、そうではない子どもなど様々である。全員がゴールしなければ勝てないことを理解している子どもが、自分がゴールしたあとは「君、ゴールにいった」と指示をだしている反面、相手チームが全員ゴールし試合が終わっても「まだ私ゴールしてない」といってゲームを続けようとしている子どももいる状況である。あるゲームの最中、ボールの取りあいになりゲーム中ではあったが保育士がゲームを中断し、「ボールの取りあいになったらどうする？」という問いかけに対し、「ジャンケン」という声。「取りあいになったらすぐにジャンケン？ 少し取りあってから？」という問いには、「審判（保育士）が5数えても取りあいが続いていたらジャンケン」という声があがり、新しいルールがつけ加わることとなった。全員がゲームを体験し終わり、保育士の「どうだった？」に対し「おもしろかった」「楽しかった」という子どもの声。さらに、「このゲーム名前がついてないんだけど何かつけて」という保育士の問いかけに対し、「ラグビーみたいだから、ラグビーパスボール」という子どもの声。「ラグビーパスボール」という名前がついたボールゲームの誕生である。

その後3回の取り組みを通じて「ラグビーパスボール」のルールは、チームの全員がゴールしたチームが勝ち、一度ゴールした子どもはゴールできない、セーフティマットをゴールとするが、ボールを持って両足でしっかりのったらゴール、試合時間は4分とし、全員がゴールできていない場合は時間切れの時点でゴール数の多いほうを勝ちとする、友達の服をひっぱったり、たたいたりしてはいけない（反則したら相手チームのボールになる）、最初のボールはジャンケンで決める、ボールの取りあいになったら、審判（保育士）が5数えても取りあいが続いていたらジャンケン、人数が4人对5人で対戦する場合は、4人のチームはチームの誰かが2回ゴールする、というように保育士と子どもたちで考えあい整理された。

生活グループで取り組みはじめたため、4人のグループが4つ、5人のグループが2つ存在しているため「人数が4人对5人で対戦する場合は、4人のチームはチームの誰かが2回ゴールする」というルールができあがっている。保育士は、ボールゲームにおける人数の矛盾について子どもたち自身に気づいてほしいと願っている。

(2) チーム人数の決定と記録係を決める

生活グループでの取り組みはまだ続いているが、保育士としては同じ人数でゲームをさせたいと考えている。4人（赤チーム）対5人（青チーム）のゲームが終わってからの話しあいにおいて保育士が、「今のゲームどうだった？」と見ていた子どもも含め全員の子どもたちに問いかけると、5人のチームに対し「君たちのチームすごい」という声。「何がすごい？」に対しては、「上手」「パスが上手」「走るのが速い」という反応。結果は、時間切れで3対3の引き分けだったにもかかわらず5人のチームに対して賞賛の声が続いている。その様子から、4人のチー

ムの子どもたちはふてくされはじめている様子。保育士が、「でも、赤チームも3点入れて同点だよ。でも青チームの方が上手なんだ」という保育士のことばに、4人のチームのある子どもが怒りだし、「だって人数そっちのほうが多いじゃん。男の子だって多いし、走るのだって速い子ばかりだし」という反論の声。

それらの子どもたちの声をひきとって保育士が、「今、　　ちゃんが人数が多いからって言ったけど、昨日の話しあいでは人数は一緒にしないでいいって言ってた子はどうかな？ 今日の試合で5人のチームの方がパスが上手ですぐにゴール決めたよね、4人のチームゴールするのとっても大変そうだったよね。試合するとき人数一緒にしてやってもいいかな？」と聞くと、昨日の話しあいのなかで4人对5人でもいいと言っていた子どもも含め「人数が一緒のほうが公平でいい」という返事が返ってくる。

次は、何人のチームにするかが課題である。

保育士が、「今日5人のチームでやってどうだった？ すっす～と動けた？」という問いに、「ゴールのところでごちゃごちゃになる」という子どもの声。「じゃあ、5人对5人にする？ 4人对4人にする？」という保育士の問いかけに対し、子どもたちは「4人对4人」という声。この「今日5人のチームでやってどうだった？ すっす～と動けた？」という問いかけの背景には、昨日のゲームで、本来は5人のチームであったが、一人欠席したため4人でのゲームを体験し5人のチームに勝ったある子どもが、「5人だと動きにくい、4人だとすっす～と動ける」という声を保育士が聞いていたのである。

保育士は、ボールゲームは人数も含め対等平等の条件ですることが重要であることを子どもたちにわからせたかったため、あえて4人对5人のゲームを数回続けたあとの話しあいであった。4人对5人のゲームを観察していると、4人のチームの方がゴール付近でパスをよくまわしゴールできていたため、4人のチームにしようとも考えていた保育士であった。さらに、4人のチームが勝つであろうと思っていたのであるが、もともとある生活グループでのゲームであったため、その時点での力の差があり5人のチームが勝つこともあった。しかしながら、ある子どもの「5人だと動きにくい、4人だとすっす～と動ける」という声が決め手となり4人のチームに決定したのである。

5歳児における攻防入り乱れるボールゲームを実践する際には、1チームの人数を何人にするかによってボールゲームのおもしろさが左右されるといえる。この「5人だと動きにくい、4人だとすっす～と動ける」という声は、幼児期の子どもの数量認識や空間認識の発達を表しているといえ、4人对4人でのゲームが妥当のようである。攻防入り乱れるゲームにおいては、「今ボールは味方が持っているから、どこに動くのが自分や味方にとって有利になりボールをもらえるか」「今ボールは敵が持っているから、どこに動けば敵の攻撃を防げるか、ボールを奪いかえせるか」「今自分が持っているボールはシュートすべきか、パスすべきか」という瞬時の予測・判断とそれに応じた動きが求められる。5歳児においてこれらの判断をするためには、チームの人数が大きく影響するといえよう。つまり、自分以外に味方は何人いて、敵は何人いるのか

によってそれらの判断は影響を受けるのである。

さらに、あるゲームが終わったあと保育士が「今の試合何点入ったかわかった人？」と問いかけると、ほとんどの子どもの手があがらない。「じゃあ、誰がゴールしたか、あと誰がゴールしていないかわかった人？」に対しては、ゲームをしていた子どもたちが手をあげる。そして、「ごめんね、審判をしている先生もわかりにくかったの、どうしたらいいと思う？」という問いかけに対し、紙を用意しゴールした子どもの名前を書くことになった。その役割は、次のゲームのメンバーがやることになる。しかしながら、その方法によってゲームを経験したあと、誰がゴールしたか名前を書くのは時間がかかりすぎるという声が子どもたちからあがり、事前に各チームで紙にメンバーの名前を記入しておき、ゴールしたら名前に丸をつける方法に変更している。

(3) ゲームの様子を VTR で見る

「ラグビーパスボール」のルールがほぼ固まりつつあった 12 月のある日、ゲームの様子を撮影してあった VTR から、保育士はゲーム中の 3 つの場面をピックアップして子どもたちに見せている。

一つ目の場面は、ゲーム中であるにもかかわらず記録係のところに記録を見に行く子どもの場面である。保育士が「今の 君見てどう思った？」と子どもたちに問いかけると、「試合中なのに点数の方に行ってるよ」という声。それに対し、見に行った子どもは「だって、あと誰がゴールしていないかわかんもん」という反応が返ってくる。保育士は、「そうだね、見ている方は誰がゴールしたかわかるけど、試合中の子どもたちはわからないよね」「試合中誰がゴールしたかわかった子いるかな？」に対し、記録係の子どもたち以外はほとんど手があがらない状況である。「 君、ゴールしたよって言ってあげるのはどう？」という子どもの意見がでるが、保育士が「言ってあげるっていう意見もあるけど、どう思う？」に対し「ゲーム中は聞こえん」という子どもの声。保育士が「みんなが応援していると聞こえないかもしれないね」に対し別の子どもから、「ゴールしたらなにか印をつけるのは？」という意見。「ガムテープはる」「頭になにかつける」という子どもからの意見に他の子どもたちは、「いやだ～」と反対の声。するとある子どもの「帽子を白にする」という声に全員が「いいよ」という反応。敵・味方については、当初から色ちがいのピブスを着ていたため区別がつくのであるが、ゴールしたかあるいはまだしていないかについては記録係にしかわからなかったのである。

保育士がこの場面をピックアップしたのは、記録係を決めた後のこれまでのゲーム中に何度か、「あと誰がゴールしていないんだっけ？」と言っている子どもが多かったからである。

二つ目の場面は、ボールを持ってゴールに向かって走っていた 君が、ゴールうしろでディフェンスをふりきってフリーになっている 君に見事なパスをともしゴールが決まった場面である。その場面を見せてから保育士が「どうだった？」と子どもたちに聞くと、「 君すごい」という反応。すかさず保育士が「 君が投げたボールをしっかりとキャッチしたよね。君がボールをキャッチできたのは 君もすごいってことだよ。 君がボールを取りやすいよ

うに上手に投げてあげたんだよね」と説明を加える。いつもおとなしい、君と君がとてもうれしそうにしていたのが印象的であった。

11月後半から園庭で「ラグビーパスボール」を行うようになっており、ホールで行っていた時に比べ、セーフティマットにとびこむ方向が360度どこからでも可能になったこともこのパスからゴールの場面を可能にしている。ゲームを行う場所の広さの関係により、ホールで行っていた時には壁にセーフティマットをつけていたため180度の方向からのゴールのみであった。

さらに三つ目の場面は、君と～君が2人でパスをまわしているだけで、同じチームの他の2人の子どもにパスをするどころかゴールさえもねらっていないところであり、チームという意識がまったく感じられない場面である。保育士が「どうだった？」と問いかけると、「ずっとパスしてる」。「なぜ君と～君はずっとパスしてたのかな？」と保育士が問いかけると、2人はだまったままである。ある子どもが「早くパスすればいいのに」とつぶやくと、それを受けて保育士が「早くパスするのって大切だよ。じゃあどんな時に早くパスすると思う？」に対し「だめな時」。「だめな時ってどんな時」に対しては「ゴールできない時」。「ゴールできない時って？」に対しては「敵がいっぱいいてゴールできない時」という子どもたちの声があがった。「そうだよね、敵がいっぱいいてゴールできなかったら、一緒のチームの子にパスしたほうがいいよね」と保育士。

さらに、ゴールするチャンスはあったが、パスをし続けている君と～君の場面においても「ずっと2人パスしている」という指摘の声が子どもからあがる。さらに別の子どもから「

は～が好きだからずっとパスしてるんだよ。～がいいからだ」という指摘に対し、が「ちがうわ」と反論。「じゃあ、今日はちゃんがお休みだったから代わりに～君が入ったけど、ちゃんだったらパスするのか」に対しては「するわ」と反論。そして、ちゃんにパスすればゴールできた場面では、「なんで～はにパスしないんだ?」「あ～あ～2人だけでやってる」「時間がきちゃう」と疑問や批判の声が子どもたちからあがったのである。

保育士がこの場面をピックアップしたのは、次のような状況があったからである。

この日は、が入っているチームのメンバーである子どもが欠席したため、が～を代役に指名している。にとって～は憧れの存在であり、彼を選ぶことで彼から好かれたいという思いがあったようである。または自己中心的であり、以前から「はパスしてくれない」と子どもたちから批判の声がでていたのである。

以上の三つの場面を保育士がピックアップしたのは、それぞれの場面で次のようなことを子どもたちにわかってほしかったからである。

まず、一つ目のゲーム中であるにもかかわらず記録係のところに記録を見に行く子どもの場面では、仲間意識についてである。ゲーム中にこのような行為をすること自体好ましくないように思いがちであるが、保育士はそうに捉えるのではなく「自分だけがゴールすればいいという姿から、チーム内で誰がまだゴールをしていないのかを気にするようになり、チームを意識しはじめた⁽³⁾」と捉えたのである。

二つ目のボールを持ってゴールに向かって走っていた 君が、ゴールうしろでディフェンスをふりきってフリーになっている 君に見事なパスをとおしゴールが決まった場面では、「パスの必要性、ボールをキャッチすることの重要性⁽⁴⁾」についてである。

さらに、 君と～君が2人でパスをまわしているだけで、他の2人の子どもにパスをするどころかゴールさえもねらっていない場面では、ただ単にパスをすればいいのではなく、「パスがとおりゴールが決まった時の『やった』という思いをすべての子どもに味あわせるためには何が必要なのか？」という保育士自身の疑問に対しての答えでもある「意味のあるパス⁽⁵⁾」についてであり、そこには「チームの意味」についても含まれているであろう。

さらに、二つ目、三つ目の場面においては、「今ボールは味方が持っているから、どこに動くのが自分や味方にとって有利になりボールをもらえるか」「今ボールは敵が持っているから、どこに動けば敵の攻撃を防げるか、ボールを奪いかえせるか」「今自分が持っているボールはシュートすべきか、パスすべきか」という、攻防入り乱れるボールゲームに必要な時間・空間認識をわからせることにおいても有効ではないかと思われる。

(4) 男が強い、女は弱い？——チーム決めに子どもたちの手に——

その後、年が明けての2005年1月は「生活発表会」の取り組みがあり「ラグビーパスボール」のゲームは中断していたが、保育士は「生活発表会の練習を通してみんなで協力する姿が少しずつできてきているので、このことをきっかけに『ラグビーパスボール』のチームも子どもたちで決めていけるようにしていきたい」という思いをもっていた。また、「ラグビーパスボール」に必要な「人や物の動きを予測・判断する力」や「時間・空間認識」を身につけさせようというねらいをもち「ラグビーパスボール」と並行して取り組んでいた「しっぽとり」という鬼あそびのチーム決めをする際に、次のような保育士と子どもたちとのやりとりの場面があった。1月末日のことであった。

この日は、16名の子どもたちが「しっぽとり」をやるのであるが、保育士が「チームどうやって決める？」と問いかけると「ジャンケンでいいわ～」という子どもたちの反応。ジャンケンによって、青チームが男6名・女2名、白チームが男4名・女4名で「しっぽとり」がスタート。その結果は圧倒的な青チームの勝利となり、負けた白チームから「青は強い子が多い、でも白は女の子が多いから負けたんだ」という声があがったのである。以前からこのような「強い子あるいは女だから」という声が子どもたちから聞こえており、保育士は気になっていたようではある。しかしその反面、その話しあいにおいて「女の子でも強い子いるよ」という声もあがっていたのである。

2月にはいり、「ラグビーパスボール」のチーム決めをする際の話しあいにおいて保育士は、前回の「しっぽとり」の話しあいにおいてだされた「女の子でも強い子いるよ」という声を取りあげ子どもたちに問いかけている。

「女の子でも足の速い子いないかな？」という保育士の問いかけに、「いる、 チャン」とい

う子どもの声。さらに、「女の子でもしっぽをたくさん取っていた子いたよね？」に対しては「　　ちゃん」という子どもの声。また、「側転の時を考えてみて。女の子でも上手な子いたよね？」に対しては、「いた、　　ちゃんに　　ちゃんに　　ちゃん」。「女の子だから弱い、男の子だから強い、これって関係するのかな？」という保育士の問いかけに沈黙する子どもたちであった。「らいおん組のなかには、体が大きい子もいれば小さい子もいるよね。体が小さい子が弱いのかな？」に対しては、「　　君小さいけどすばしっこいし側転上手だった」という子どもたちの反応であった。「先生はどの子どもみんな強いところがあると思う。だから、男の子も女の子も関係なくチームを決めてみたらいいんじゃないかなって思うけどどうかな？」という保育士の提案に、全員の子どもが「いいよ」という反応であった。

以上のような話しあいをもとに、「ラグビーパスボール」のチームわけを考えていくことにしたのである。赤チーム12人と青チーム13人は、保育士がその時点での子どもたちの「できる」と「わかる」を判断し均等になるようにして決めたのであるが、チームごとの4人ずつのメンバーは子どもたちが話しあいによって決めていくこととなった。4人ずつのメンバーで赤チーム・青チームそれぞれ4チームを構成しての対抗戦とし、チームの勝ち数により勝敗を決するのであるが、赤チームでは4人、青チームでは3人の子どもが2試合に出場する必要がある、そのメンバーも子どもたちで決めるのである。

赤チームは男2人・女2人のチームをつくることには決まったのであるが、ある子どもが、一緒のチームになりたくないと思っている子どもと自分が同じチームに決まりかけると「えっ～」という声をあげ、自分が入るチームにはうまい子がきてほしいと思っておりなかなかチームメンバーが決まらない様子。さらに、他の子どももチーム決め話しあいになかなか参加していない状況である。保育士がその話しあいに参加し、「えっ～」といっている子どもに対し「　　のチームが勝つだけでなく、他のチームも青チームに勝つ必要があるの」と説明しても黙ったままである。「どうしようかね？」という保育士の問いかけに、「もう適当に決めよう」という子どもの一声で、ホワイトボードに保育士が書いてあった名前の順番に男2人・女2人のチームをつくることになった赤チームである。

一方青チームは、リーダーをまず決めてから「男の子、女の子関係ないからジャンケンにしよう」という意見によりジャンケンで決め、さらに最後の4番目のチームは「最強にしよう」とベストメンバーで組むこととなった。

2日後、以上のような話しあいを経て決まったチームで対戦をおこなうことになった。

保育士からの提案により、ゲーム時間をこれまでの4分から5分に変更することを新しいルールに加えることにする。結果は3勝対1勝で青チームの勝ちになるのであるが、ゲーム時間を5分にしたことにより、これまでは時間切れでその時点でのゴール数で決着をつけていたのであるが、当初のルールである全員ゴールして勝つチームが3チームもでてきたのである。ゲームの様子も、意味のあるパスが多くなり、あと一人で全員ゴールで勝利という場面となると、攻撃ではなんとかその子どもにゴールさせようというチームの意識や、逆に防御では最後の一人を徹底的

にマークする意識が鮮明になってきた子どもたちであった。

チーム決めの話し合いの時からチームにまとまりがあった青チームの勝利となったのであるが、保育士としては子どもたちそれぞれの「できる」と「わかる」を考えバランスよく2チームにわけていたため、最後まで変更せずにこのままでおこなうことに決定したのである。

(5) 最後の対戦

赤チーム、青チームの構成は同じメンバーであるが、4人のチームを子どもたちで決めるようになってから3回目のゲームの日である。

結果は2勝1敗1引き分けで青チームの勝ちであったが、両チームとも前回や前々回のゲームに比べると、これまでのゲームでまだゴールできていない子どもに動き方を指示しゴールを決めさせようと作戦をたて、はじめてゴールが決まった子どもが出現したり、ゲームを見ている子どもたちから「 にパスして」「 が後ろにいったからボールとられないようにしろ」「 はあいている場所に走りこんで」などの確な指示ができるようになってきている。

いよいよ最後の対戦に向けたチーム決めの話し合いが3月初旬におこなわれた。この話し合いに保育士は参加せず、すべて子どもたちに決めさせており、1ゲーム目から4ゲーム目までのメンバーをそれぞれ発表したあとで対戦チームを変更することも可能にしている。赤チームは、時間はかかったものの保育士の助言をえずに自分たちでチームを決めることができていた。

両チームの決まったチームメンバーを見て保育士は、「一つのチームだけ強い子どもを集めるという決め方をしておらず、それぞれのチームに動きのいい子どもをいれてバランスよくチーム編成をしている」と思ったようである。両チームの1ゲーム目から4ゲーム目までのメンバーをホワイトボードに書きだし、対戦チームの変更も認めていたが、ホワイトボードを見て青チームは「もうそのままでもいい」と次も当然勝つといった様子であった。これまでなかなか勝てなかった赤チームは、「2ゲーム目と3ゲーム目のチームを入れ替えよう」と青チームのメンバーを見て話しあっている。

いよいよ最後の対戦のはじまりである。これまで保育士と子どもたちで創りあげてきたルールである、チームの全員がゴールしたチームが勝ち、一度ゴールした子どもはゴールできない、

セーフティマットをゴールとするが、ボールを持って両足でしっかりとのったらゴール、試合時間は5分とし、全員がゴールできていない場合は時間切れの時点でゴール数の多いほうを勝ちとする、友達の服をひっぱったり、たたいたりしてはいけない（反則したら相手チームのボールになる）、最初のボールはジャンケンで決める、ボールの取りあいになったら、審判（保育士）が5数えても取りあいが続いていたらジャンケン、を教室で確認し、ゴールであるセーフティマットや記録場所、試合時間を計るストップウォッチの準備などを両チーム協力してはじめる子どもたちであった。ゲームの準備が終了すると、それぞれのチームにわかれ作戦をたてはじめている。

結果は、これまで負け続けていた赤チームが3勝1敗の勝利で最後の対戦は終了するのである

が、最後の対戦を見て保育士は「ルールや約束を守らなければゲームが成立しないこと」「仲間を意識できその子どもをなんとかゴールさせようと作戦を考えられるようになったこと」「自分たちでルールをつくりあそびを展開できるようになったこと」が子どもたちの育ちとして確認できたと述べている。さらに、「自分のことしか考えられなかった子どもたちが相手のことを考えられるようになったことは、この『ラグビーパスボール』の取り組みが大きかった」とも述べている。

つまり、保育士が「ラグビーパスボール」で子どもたちに教えたい内容として設定した教科内容である「チームで協力してゴールする充実感を味わうことができる」「自分達で作戦を立ててあそぶことができる」「決められたルールを守りながらあそぶことができる」が達成できたことを意味している。そしてこれまでのゲームの記録を振り返ってみると、全員が一度はゴールしているのである。

最後の対戦を終えた子どもたちは、「またやろうな」「今度は負けないぞ」と言いながら最後の後かたづけを全員ではじめていた。

3 子どもたちは「何」がわかったのか

以上の「ラグビーパスボール」の取り組みを通じて、子どもたちは「何」がわかったのであろうか。この「ラグビーパスボール」の実践は、「チームの全員がゴールしたチームが勝ち」「一度ゴールした子どもはゴールできない」「ボールをぶつける的をなくす」という保育士の提案をスタートとしており、子どもたちへの「ゴールを何にする？」という問いかけにはじまり様々なルールを保育士と子どもたちの手によって創りあげているところに大きな特徴がある。最終的なゲームのイメージを保育士は想定していたが、ゲームの前後に必ず子どもたちの話しあいを保育士が組織し、ルールやゲームの形態を一方的に押しつけるのではなく子どもたちに気づかせていくことに主眼がおかれそれが貫かれている。保育士が子どもたちに最初に提案した「チームの全員がゴールしたチームが勝ち」「一度ゴールした子どもはゴールできない」「ボールをぶつける的をなくす」については、ボール操作能力に優れている子どものワンマンプレーにならないためのしかけであり、「パスがとおりゴールが決まった時の『やった』」という思いをすべての子どもに味あわせるためには何が必要なのか？」という保育士自身の疑問に対する答えともなっている。これらのルールによって、全員がゴールを決めるためにはボールゲームにおける戦略・戦術を子どもたち自身が自ら考え「わかる」ことが不可欠となっており、2月以降の取り組みから子どもたちがわかりはじめていることがうかがえる。

チームの人数を決める取り組みにおいては、当初生活グループで取り組んでいたこともあり4人対5人でのゲームについては何の違和感も持っていなかった子どもたちであるが、「5人だと動きにくい、4人だとすす～と動ける」という子どもの声をきっかけに、ボールゲームにおいて必要な平等性についてわかることにつながっている。さらにこの子どもの声は、ボールゲーム

に必要な数量認識や時間・空間認識を理解しはじめていることも意味している。さらにゲームの記録を子どもたちにまかせることを通じて、数量認識もわかりはじめることとなる。

保育士がピックアップして子どもたちに VTR で見せた 3 つの場面からは、ボールゲームに不可欠な「仲間の必要性」「パスの必要性」「ボールをキャッチすることの重要性」「意味のあるパス」「チームの意味」が、また「今ボールは味方が持っているから、どこに動くのが自分や味方にとって有利になりボールをもらえるか」「今ボールは敵が持っているから、どこに動けば敵の攻撃を防げるか、ボールを奪いかえせるか」「今自分が持っているボールはシュートすべきか、パスすべきか」という、攻防入り乱れるボールゲームに必要な時間・空間認識がわかったといえよう。

「強い子あるいは女だから」「女の子でも強い子いるよ」という子どもの声をきっかけとした話しあいやその後のチームづくりの取り組みからは、性差による役割分業意識の矛盾について気づかせるきっかけとなっており、対等平等の意識の芽生えにもなっているであろう。

さらに、最後の対戦の話しあいとゲームの様子、ゲーム後の子どもたちの状況から、競争における共同的競争の重要性がわかりはじめたのではないと思われる。つまり、自分ができさえすればいいのではなく、すべての仲間が「できるようになること」「楽しい、おもしろいと思えること」の大切さがわかり、そしてそのためにはどのような方法があるのかを考えることの重要性についてわかったのである。

おわりに

幼児体育における教科内容と教材の関係を明らかにしていくことを目的として、2004 年度に T 市 N 保育園の 5 歳児クラスにおいて取り組まれた「ラグビーパスボール」の実践を分析してきた。

この実践の分析を通じて、「教材を先に選択していたとしたら、このような子どもたちの姿は見られなかったと思われる」という、この実践を展開した保育士のことばからもわかるように、「どのような子どもに育ててほしいのか、育てたいのか」という子ども像を前提としたうえで体育における教科内容（体育で子どもたちに身につけさせたい内容）を設定し、その教科内容に応じた教材の選択とその教材の特質に応じたわからせ方を含んだ指導方法にいたるまでのすじ道の描き方の重要性を指摘できる。ともすればこれまでの保育実践に多く見られる「教材先にありき」ではないのである。

筆者が描いた幼稚園や保育所での体育の取り組みにおいて子どもたちに身につけさせたい教科内容である、(1) 自分自身について、できた・うまくなったという実感をもっている、(2) 友だちの動きと自分の動き、友だち同士の動きの違いを見つけ教えあうことができる（技術の比較、技術認識、自己認識、他者認識）、(3) 友だちができるように、うまくなったことをみんなで喜びあえる（他者認識、集団認識、人権意識とヒューマニズム）、(4) ルールの必要性や重要性について

理解し、必要なルールづくりができる（社会認識、ルール認識）、(5) みんなで決めたルールや約束事、順番が守れ、必要な準備や後かたづけができる（社会認識、集団認識）、との関係でこの「ラグビーパスボール」の実践をみると、(4) ルールの必要性や重要性について理解し、必要なルールづくりができる（社会認識、ルール認識）、(5) みんなで決めたルールや約束事、順番が守れ、必要な準備や後かたづけができる（社会認識、集団認識）、の教科内容が達成できたと判断できる。

つまり、(4)(5)の教科内容を達成するためにはボール運動という教材が適していたということがいえる。もちろん、この実践において他の(1)(2)(3)の教科内容についても多少なりとも影響をもたらしたといえるが、「できた・うまくなったという実感」「友だち同士の動きの違いを見つけ教えあうこと」「友だちができるように、うまくなったことをみんなで喜びあえる」という教科内容を子どもたちにより深くわからせるためには、ボール運動という教材が持っている特質を考えるとこれらの教科内容を達成するには不適切な教材といわざるをえない。これらの教科内容を達成するのに適した教材の選択が求められ、そのための教材研究が必要となる。

今後の課題として、教科内容を設定していくための教材研究の重要性をあげることができる。つまり、これから子どもたちと取り組もうとしている教材それぞれの技術的特質と技術指導の系統性（その教材でしか味わえないおもしろさとそのことを保障する子どもたちの認識発達に応じた指導方法）、さらにそれぞれの文化的・教育的価値についての分析・研究をおこない、それぞれの教材に取り組ませることによって何を教え・わからせることができそうかについて明らかにしていくことである。それらの検討によって、子どもたちに教えたい教科内容が鮮明になってくるであろう。

さらに、教材研究をもとにしての年間の教材配列の検討、つまり子どもたちにわからせたい内容の順序性についての検討も今後の課題である。

註

- 1) パスボールは、愛知県名古屋市にある名東保育園において保育士と5歳児クラスの子どもたちにより1986年度に考案されたボールゲームである。(1) ボールの取りあいになったら審判（保育士）が10数える。それでも取りあいが続いていれば審判ボールとし、審判が目をつぶり空中に投げあげて再開する、(2) コート外にボールがでたら最後にボールに触れた子どもの相手チームのボールになり、ボールがでたライン上からコートに投げ入れて再開する、(3) 得点後は得点されたチームのボールになり、ゴール前から投げ入れて再開する、という3つのルールがつくりだされ、それらのルールを守りながら3人対3人でコート内を自由に走り、パスをしあいながら相手のゴール（ベニヤ板、横80cm×縦90cm）にボールをぶつけて得点しあうものである。その後、1989年度の同園の取り組みにおいては、ゴールが子どもたちがダンボールでつくった鬼に変化している。

引用文献

- (1) 拙著「乳幼児のからだづくりと運動」『ちいさいなかま』No. 424, 2002年, 36-37頁
- (2) 早川文子「『ラグビーパスボール』の取り組み」『第37回全国保育園団体合同研究集会要綱』2005年, 140頁

- (3) 早川文子「『ラグビースポール』の取り組み」『第37回全国保育団体合同研究集会提案資料』2005年, 1頁
- (4) 同上
- (5) 同上